

日高山脈襟裳十勝国立公園ビジョン(案)
(パブコメ版)

令和7(2025)年●月●日

日高山脈襟裳十勝国立公園協議会

目次

1. はじめに	2
(1)ビジョン策定の目的.....	2
(2)対象区域	2
(3)日高山脈襟裳十勝国立公園の概要	3
2. 価値・魅力.....	4
3. 現状と課題	6
(1)保護に関する事項	6
(2)利用に関する事項	9
(3)管理運営体制に関する事項	11
4. 基本理念	13
(1)自然環境の厳正な保護.....	13
(2)適正な利用の推進.....	13
(3)連携・協働の推進	13
5. 国立公園としてのビジョン(あるべき姿、目指すべき将来像)	14
(1)原生的な自然とその恵みを、後世まで守り伝えていく国立公園.....	14
(2)利用者のレベルに応じた楽しみ方があり、自然体験の質が確保されている国立公園	14
(3)みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園	14

1. はじめに

(1)ビジョン策定の目的

日高山脈襟裳十勝国立公園は、2024(令和6)年6月25日に日高山脈襟裳国立公園とその周辺地域を含めて新たな国立公園として指定されました。本公園の誕生は、日高山脈を核とした自然環境等を長年にわたり保全し、適正に利用するとともに、文化を育んできた地域の関係者及び関係機関の長年に渡る取組が評価され結実したものです。

本公園を未来に引き継ぎより良い姿にしていくためには、本公園が目指す将来像を明確にし、その実現に向けて関係者が連携して取組を進めていく必要があります。

このため、関係者が連携する場として「日高山脈襟裳十勝国立公園協議会」を設置し、同協議会において本公園が目指すべきビジョンを策定しました。

今後、本ビジョンの実現に向けて本公園と繋がるすべての関係者ができることを持ち寄り、連携して取組を推進することにより、世界水準の国立公園を目指します。

(2)対象区域

日高山脈襟裳十勝国立公園全域を対象とします。



図1:日高山脈襟裳十勝国立公園 公園区域図

(3)日高山脈襟裳十勝国立公園の概要

本公園は、南北およそ140kmに及ぶ日高山脈を中心とした陸域面積が日本最大の国立公園です。本公園は、地殻変動を受けて形成された非火山性連峰を基盤に、山地を核として育まれた深く原生的な自然林生態系が広がる風景を有するものとして、国立公園に指定されています。国内最大の原生流域が残された地域にあること、海から高山帯まで一体として指定されていることが大きな特徴です。

2. 価値・魅力

日高山脈襟裳十勝国立公園の核心部となる日高山脈は「北海道の背骨」と呼ばれ、鋭い稜線から急峻な山腹を経て広大な山麓へと続き、そこに日本最大の原生流域が広がっています。その成り立ちは、北海道付近において2つのプレートの衝突が進行し、東側のプレートの地殻がめくれ上がるように突き上げられたことに由来し、本来は地下深くにある地質の断面が連続的に地表に現れています。このような場所は世界的に見ても珍しく、ユネスコ世界ジオパークにも認定されているアポイ岳（標高810m）周辺には、地球深部（マントル）の様子を知ることができる新鮮なかんらん岩が見られます。

本公園はその特異な成り立ちと共に、海岸から高山帯までの大きな標高差と南北方向に長い特徴から、多様な環境を有し、生物多様性に富んでいます。広大な山域一帯には自然林が広がり、国指定天然記念物「沙流川源流原始林」や我が国最大規模のまとまりをもつ原生流域などがあります。

日高山脈で育まれた動植物の死骸が分解されて河川に流れ込み、豊かな栄養分を海に運び、魚介類や海藻などを育てています。その海で栄養を蓄えたサケやアメマスなどは産卵のために川を遡上し、ヒグマやシマフクロウなどの食料となっています。このように、日高山脈を源流とし太平洋に注ぐ河川は、山岳から海に至る生態系のつながりを育てています。

また、日高山脈を源流とする河川の流域には、アイヌのコタン（集落）が形成され、アイヌの人々は、狩り場とした後背地や対岸に広がる原生林までを含めた一定領域をイオル¹（伝統的生活空間）として、その中で動植物を活用して生業を営み、自然と共生して豊かな文化を育んできました。国指定名勝ピリカノカの構成資産「ポロシ^{（ぼろしりだけ）}（幌尻岳）や十勝幌尻岳^{（としかぼろしりだけ）}」や「オンネエンルム^{（えりもみでき）}（襟裳岬）」をはじめ、祈りや崇拜の対象となってきた重要な場所も多くあります。また、アポイ岳やエンルム岬など、民話や伝説の題材になっている場所もあります。

最高峰である幌尻岳（標高2,052m）をはじめ、1,900m を超える山々が連なり、主稜線やカル地形周辺では高山植物が発達し、ヒダカキンバイソウなどの固有種を含む多様なお花畑が広がっています。山の成り立ちが古いことや特異な地形・地質を有する本公園では、他山系とは異なった高山植物相が見られるのも特徴です。森林にも多様なタイプがあり、針広混交林のほか、北部の亜寒帯性の針葉樹林や南部には道内ではやや珍しいミツデカエデやアカシデなどを含む冷温帯性の落葉広葉樹林が見られるほか、アポイ岳一帯のかんらん岩地帯にはキタゴヨウとアカエゾマツを主体とする針葉樹林が広がっています。

動物相も多様で、ヒグマ、エゾシカなどの大型哺乳類が多数生息します。氷河期の遺存種といわれるエゾナキウサギも分布し、日高山脈の南部では、低標高（標高50m）にも生息が確認されています。襟裳岬付近の海岸には、豊かな海を象徴するように、ゼニガタアザラシなどの海生哺乳類が生息しています。また、本公園では、自然度の高い植生や河川に支えられ、生態系の上位種であるシマフクロウやクマタカなども生息しています。そのほか、国内ではアポイ岳にのみ生息するヒメチャマダラセセリ、陸産貝類の固有種アポイマイマイ、甲虫類の希少種チビゴミムシ類などが生息しています。

¹ イオル：イウォロやイウォル、イオロなどとも呼ばれる、アイヌの伝統的生活空間。動物の捕獲や山菜採取など、自然と共生していたアイヌの人々の伝統的な生活の場。

1 独特な自然景観にも魅力があります。日高山脈の稜線部には、寒冷期に氷河が作り上げたカール
2 (圏谷)、ホルン(氷食尖峰)、アレート(鋸歯状山稜)などの氷食地形が見られます。山麓部に形成さ
3 れた険しい峡谷や断崖も、新緑や紅葉シーズンを中心に美しい景観を見せています。襟裳岬周辺で
4 は、海成段丘、海食崖、岩礁などの海岸地形が発達し、景勝地となっています。さらに、本公園外の地
5 域からも雄大な山々が連なる素晴らしい景観を見ることが出来ます。

6 本公園の利用上の魅力として、日高山脈の山々は、沢登りや、やぶこぎを要するコースも多く、こ
7 こでしか味わえない本格登山の魅力があります。ただし、日高山脈の登山には、十分な体力、知識や
8 経験、的確な装備と登山計画が必要です。一方、低標高域にあるアポイ岳などの山には登山道が整
9 備され、日帰りで行くことのできる人気のコースとなっており、高山植物や日高山脈らしい山岳景観
10 を楽しむことができます。近年は山麓で雄大な山岳景観を眺望するだけでなく、サイクリングやラ
11 フティング、クルーズなどの新しい利用がされつつあります。

12 そのほかに利用だけではなく、国立公園の指定前から各地域でさまざまな環境保全の取組が行わ
13 れ、登山道やトイレ利用の適正化、高山植物群落の再生事業などが地元を中心として行われています。

3. 現状と課題

(1)保護に関する事項

・高山生態系

日高山脈には、成り立ちが古く特異な地形・地質があり、固有種や隔離分布種が多く生育します。特にアポイ岳は、ヒダカソウなどの固有種や希少な隔離分布種が集中し、アポイ岳高山植物群落は国指定特別天然記念物に指定されています。また、国内では唯一のヒメチャマダラセセリの生息地です。しかし、ヒダカソウなどの希少植物は度々盗掘の被害を受け、大きく個体数が減りました。また、気候変動の影響と考えられる植生遷移の進行により、ハイマツ群落が増え、高山植物群落の衰退が進んでいます。ヒメチャマダラセセリもこの影響を受け、その個体数の減少が続いてきました。日高山脈の高山帯全体においても、希少植物の盗掘被害のほか、エゾシカの増加やオーバーユース(登山道逸脱による踏み付け・トイレ問題など)によっても、希少種の生育基盤が脅かされています。

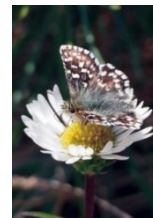
一方で、保護団体による高山植物の盗掘防止パトロールや登山者に対するマナーの啓発等が継続して行われているほか、地域ぐるみで高山植物群落の保全の取組もされています。



七つ沼カールと幌尻岳



カムイエクウチカウシ山のお花畑

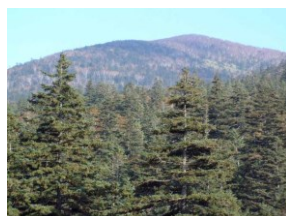


ヒメチャマダラセセリ

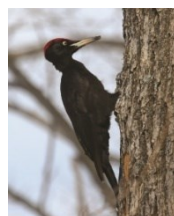
・森林生態系

日高山脈は広大な森林を擁し、原生的な森林も見られます。森林にも多様なタイプがあり、針広混交林のほか、北部には亜寒帯性の針葉樹林、南西部には冷温帯性の落葉広葉樹林、またアポイ岳一帯のかんらん岩地帯にはキタゴヨウとアカエゾマツを主体とする針葉樹林が広がっています。広大な森林が広がる本公園は、ヒグマやエゾシカのほか、天然記念物のクマゲラ、希少猛禽類であるクマタカなどの重要な生息地になっており、今後もクマゲラやクマタカが生息するためには大径木を含む発達した森林が必要になります。また、山地の岩場には氷河期の生き残りと言われるエゾナキウサギが生息しています。

本公園内の国有林野の大部分には、林野庁の森林生態系保護地域が設定されており、モニタリング等を通じて、多様かつ原生的な天然林からなる森林生態系を保護・管理するための長期的な取組が行われています。



沙流川源流原始林



クマゲラ

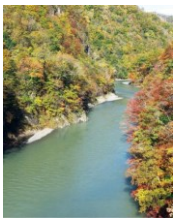


エゾナキウサギ

1 ・河川生態系

2 日高山脈に端を発する河川では、その水域や周辺環境の相互作用による河川生態系も見られます。
3 峡谷地形が随所に発達し、岩場にはヤシャゼンマイ、エゾトウチソウ、ソラチコザクラなどの特色あ
4 る植物が生育し、下流の氾濫原にはケショウヤナギの群生が見られます。また、原生的な森林と河川
5 を有する本公園は、国内希少野生動植物種に指定されているシマフクロウの重要な生息地になって
6 います。

7 シマフクロウが生息するためには、餌となる魚類が豊富に生息する河川と、営巣木となる大径木を
8 含む河畔林が必要になります。また、巣立ったシマフクロウも生息することができるよう、好適な河
9 川環境が連続的に分布する環境を整えていく必要があります。また、ケショウヤナギのように、河川
10 増水による氾濫原形成に依存する野生生物の存続に配慮していくことも、地域の生物多様性を保全
11 するためには必要であり、生物の生息・生育・繁殖の場を保全・再生・創出するなど長期的な取組が必
12 要です。



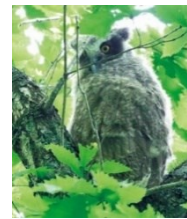
沙流川溪谷



砂礫地の多い歴舟川



ソラチコザクラ



シマフクロウ

13 ・海浜や海洋の生態系

14 本公園南部の襟裳岬周辺には海岸断崖がところどころ発達し、ヒダカミセバヤをはじめ、北方系の
15 コハマギクやチシマキンバイと温帯系のキキョウなどの希少な植物が混じって生育するほか、希少猛
16 禽類のハヤブサが営巣しています。

17 また、襟裳岬付近の海岸には、豊かな海を象徴するゼニガタアザラシなどの海生哺乳類が生息し
18 ています。ゼニガタアザラシについては、特定希少鳥獣管理計画に基づきその個体群と沿岸漁業を
19 含めた地域社会との将来にわたる共存を図る取組が進められています。

20 海洋の生態系は、河川を通して陸域の森林ともつながっており、その恵みが魚介類や海藻類を育
21 んでいます。沿岸の岩礁帯には日高地方特産のミツイシコンブ(日高昆布)が豊富に生育することか
22 らコンブ漁やウニ漁が盛んで、その漁労風景は夏の風物詩にもなっています。

23 一方で、海水温の上昇など、海洋環境の変化に伴い漁獲される水産物に変化が見られています。
24 また、海岸断崖の消失や改変も進んでおり、残された自然海岸を保持し、希少な動植物を保全するこ
25 とが必要です。



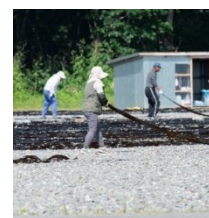
襟裳岬



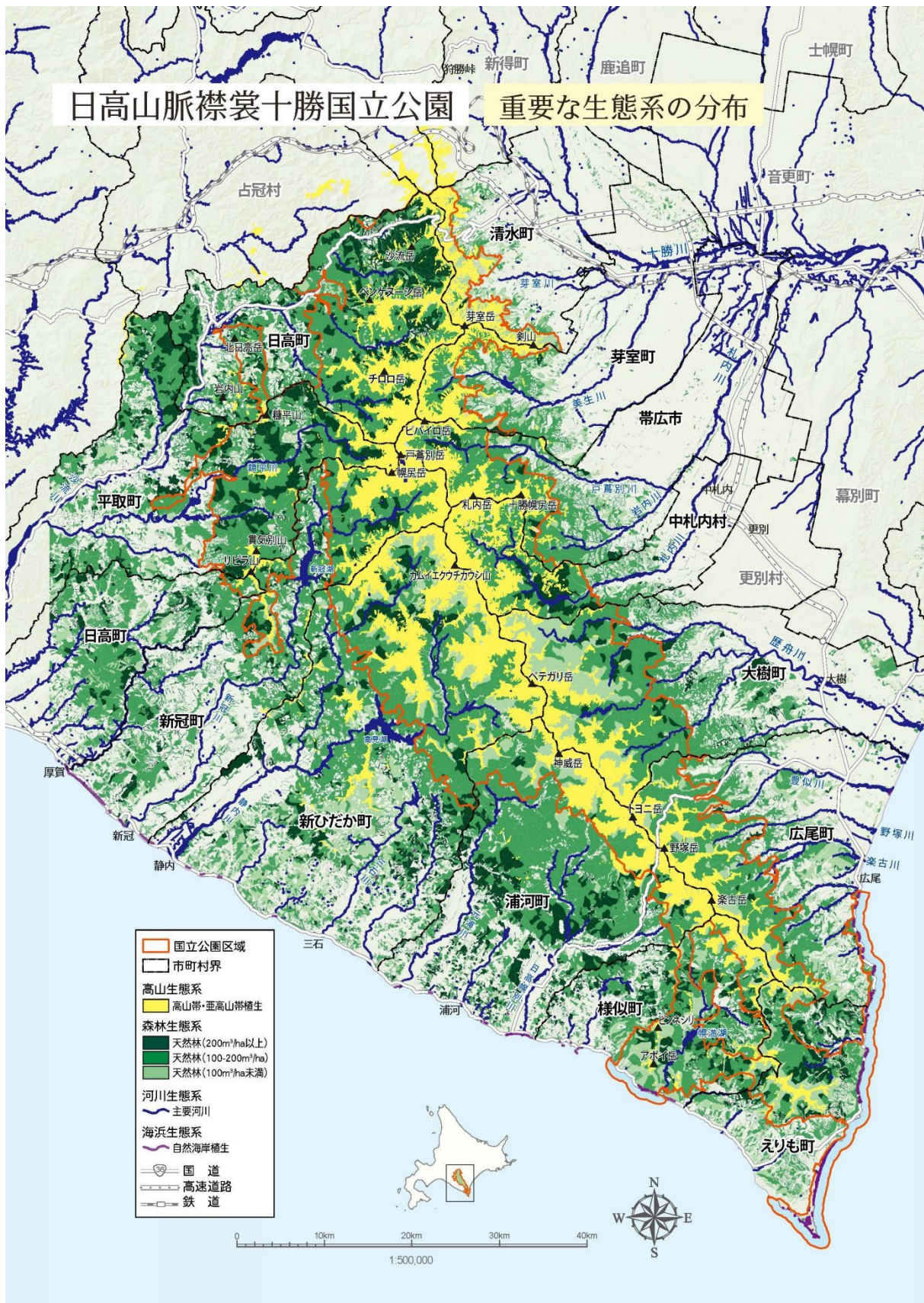
ヒダカミセバヤ



ゼニガタアザラシ



コンブ干し



1 図2:日高山脈襟裳十勝国立公園 重要な生態系の分布図

(2)利用に関する事項

・登山利用等

日高山脈の山々には、原生的な自然や独特な山岳美に加え、沢登りや、やぶこぎなどを伴うことでしか味わえない本格登山を楽しめる魅力があります。しかし、日高山脈の登山には、怪我、遭難やヒグマ等の野生動物との遭遇など様々な危険が伴うため、十分な体力、知識や経験、的確な装備と登山計画が必要です。また、高山植物の踏み付け、野営による裸地化や、焚火の跡、ゴミの投棄、トイレ跡などが確認されているため、一層のマナー等の周知の取組とともに、登山者のマナー遵守が求められます。

一方、低標高域にあるアポイ岳などの山には登山道が整備され、比較的容易に高山植物や山岳景観を楽しむことができ、人気のルートとなっています。ただし、アクセスのしやすい場所では、観光客の集中による自然環境への負荷も懸念されており、オーバーツーリズムの未然防止・抑制が必要と考えられています。



沢登りを伴う幌尻岳登山



アポイ岳登山



剣山登山

・眺望を生かした観光等

日高山脈の独特な眺望にも魅力があります。山麓部の険しい峡谷や断崖もその一つで、札内川のピョウタンの滝や幌満^{ほろまんきょう}峡などの景勝地だけでなく、日高山脈を横断する国道274号や236号沿いなどでも、新緑や紅葉シーズンを中心に美しい風景を見ることができます。また、襟裳岬周辺では、海食崖、岩礁、砂浜などの海岸地形が発達し、日高耶馬溪や百人浜、フンベの滝などの景勝地があります。さらに、十勝平野や日高沿岸をはじめ本公園外の地域からも、国立公園の核心部である雄大な山岳景観が一望できます。

ただし、利用面で拠点になるエリアが限られていることから、一部の景勝地に観光客が集中し、オーバーユースとなる懸念があります。既存の利用拠点の魅力向上、拠点エリア間(例えば、複数のビジターセンター間)の連携に取り組むほか、山麓部における豊かな自然を活かした自然に対する学びや体験の場の提供、情報発信の充実等により、滞在型の周遊観光につながる広域連携や利用の分散を図ることが求められます。



秋の豊似湖



日勝峠



日高国際スキー場



十勝平野から日高山脈



1 図3:日高山脈襟裳十勝国立公園 主要な路線・施設の分布図

(3)管理運営体制に関する事項

・関係機関・関係団体・関係者等(以下「関係者」という。)との連携

本公園には、ここでしか触れることができない多くの魅力や価値があると同時に、多くの課題があります。様々な課題に対応し、本公園をより良い姿にしていくためには、まずは関係者がそれぞれ理念を共有し、広域的に連携・団結して取り組んでいくことが欠かせません。国立公園の指定前から各地で問題意識を持って環境保全や自然体験活動等の取組が行われており、それぞれの地域で成果が蓄積されています。関係する行政機関や団体が多いことも本公園の特色の一つであり、お互いにできることを持ち寄り、連携することで課題解決に向けた大きな力になることが期待できます。さらに、少子高齢化が進行する社会において担い手の減少が課題となる中で、地域の関係者に限らず、より多くの方々の力を集約する仕組み等を考えていく必要があります。

・利用施設・拠点・体験プログラムの充実

本公園は、多様な自然・文化的要素からなり、一箇所を訪れただけではその魅力を十分に理解することは難しく、本公園全体の魅力を紹介する情報発信機能も充実してはいません。また、観光コンテンツ²等の対価の一部が保護に再投資される仕組みもあり整ってはいません。

本公園の魅力である多様な自然景観と、生活・文化・歴史が凝縮された物語を知ることで、忘れられない唯一無二の感動や体験ができるような、博物展示施設や体験プログラム等を提供することは大切です。また、ツアーコースや自然体験プログラムの造成にあたっては、自然環境への負荷や文化的要素に配慮し、利用者負担等により得られた対価の一部を保護の取組に活用する(再投資)など、保護と利用の好循環を目指すことは、持続的な地域づくりにつながります。各拠点の観光コンテンツも相互に紹介できるような情報共有体制づくりも、本公園全体の魅力発信・広域周遊につながります。

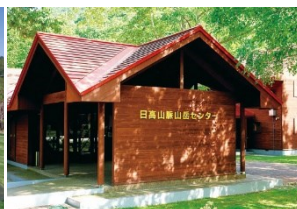
それらをサポートする自然ガイドや登山ガイド、歴史・文化を継承する担い手の育成も求められています。拠点施設のユニバーサルデザイン³化等の施設整備も課題になっています。



二風谷地区のコタン



アポイ岳ジオパーク
ビジターセンター



日高山脈山岳センター



襟裳岬「風の館」

² 観光コンテンツ:地域資源を活用して旅行者に提供する滞在・体験のプログラムやツアーのことを主に指す(「サステナブルな観光コンテンツの実践に向けた事例集(観光庁作成)」より引用)

³ ユニバーサルデザイン:あらかじめ、障害の有無、年齢、性別、人種等にかかわらず多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方(障害者基本計画(平成14年12月閣議決定))

1 ・自然・歴史・文化の学習のための人材・ソフトの充実

2 本公園には、自然や歴史・文化など、多くの魅力や価値があるものの、まだそれらに対する地域住
3 民の理解・関心は十分ではないと思われます。国立公園をより良い姿にしていくためには、地域住民
4 を含めた関係者一同が本公園の価値・魅力の共通認識を保つことが重要です。これまでも関係する
5 各市町村の博物展示施設などが中心となって、地域の自然や歴史・文化など普及啓発の取組が行わ
6 れてきており、そうした取組を継続・補強・発展していく必要があります。



アポイ岳ジオパークビジターセンターの展示

4. 基本理念

海から山脈の最深部まで連続する日高山脈襟裳十勝国立公園は、原生的で雄大な山岳景観を体感できる貴重な場であり、多くの人々を魅了し続けています。また、その優れた自然環境は、地域の人々の生活・産業の源泉として重要な機能を果たすとともに、特有の風土や豊かな文化を育み発展させてきました。

この貴重な自然環境を将来世代に継承し、後世までその恩恵を享受できるよう、以下の事項を基本として関係者が連携して厳正な保護と適正な利用を推進することにより、世界水準の国立公園を目指します。

(1)自然環境の厳正な保護

本公園の最大の特徴である原生的な自然を重視するとともに、その自然が生活の源泉であり、地域の風土や文化を育んでいることを踏まえ、後世までこれらの恩恵を享受し続けられるよう、厳正に保護する。

(2)適正な利用の推進

本公園が持つ自然環境や文化景観としての価値を損なうことのないよう、誰もが本公園の価値とその保全の重要性を認識した上で、山や海への畏敬の念をもって行動し、適正な利用を推進する。また、想定する自然体験の質に応じた利用環境の整備及び管理を推進し、原生的な自然という特性を活かした質の高い体験を提供する。

(3)連携・協働の推進

関係するそれぞれの地域、そこで活動する様々な関係者、これらの関係者が実施している様々な取組について、連携・協働を推進することにより、効率的で効果的な公園管理に繋がることから、本公園の魅力向上を図るため各地域間、各関係者間、各取組の連携を推進する。

また、本公園内には一般利用者が車両等で気軽に来訪できる場所が限定されていることから、公園外の施設の活用などについて地域関係者との広域連携の取組を推進し、その価値や魅力の理解促進に努める。

さらに、利用ルールの設定、限定体験の提供、利用者負担等に取り組み、公正な利用とその対価が保護に再投資される仕組みをつくるとともに、脱炭素化や地産地消などに取り組み、自然環境の保護と利用が持続可能な地域づくりにつながるようにする。

5. 国立公園としてのビジョン(あるべき姿、目指すべき将来像)

基本理念に基づき、国立公園の厳正な保護及び適正な利用の推進を図るため、次のような国立公園を目指して日高山脈襟裳十勝国立公園の協働型管理運営を進めていきます。

(1) 原生的な自然とその恵みを、後世まで守り伝えていく国立公園

- 本公園の根幹である原生的な自然や豊かな生物多様性が、その機能とともに良好な状態で厳正に保持されている
- 山から海までつながる独自の生態系や景観の連続性が良好な状態で維持され、自然の恵みを提供している
- アイヌの世界観をはじめとした自然環境と結びついた文化景観としての価値が維持されている

(2) 利用者のレベルに応じた楽しみ方があり、自然体験の質が確保されている国立公園

- 利用者の特性(目的・趣向)やレベル(技術・情報)に応じた幅広い楽しみ方があり、何度も訪れたくなる
- 環境に回復困難な負荷をかけないように、適正なゾーニングや利用上のルール・マナーが示され、利用者や事業者はその情報が行き届き守られている
- 利用者は、唯一無二の感動・体験をすることができ、その感動・体験を通じて、本公園を含む地域の自然、生き物、文化、暮らし等を学ぶことができる

(3) みんなで国立公園のことを考え、連携・協働して管理運営に取り組む国立公園

- 多様な立場の関係する行政機関や団体が参画する協働型の管理運営体制等を活用しつつ、それぞれが役割を認識して主体的に取り組み、様々なアイデアを取り入れながら、相互に連携・協働した取組を推進している
- 原生的な自然や生物多様性を損なうことがないよう厳正に保護しながら、地域活性化が持続的に実現できるよう、保護と利用の好循環の仕組みや連携・協働した体制が構築されている
- 国立公園外を含む本公園に関係するあらゆる人々が、本公園の価値・魅力を共有して、知恵を出し合って連携して取り組んでいる。

- 1 参照文献
- 2 ○公園の指定書
- 3 ● 環境省(2024) 日高山脈襟裳十勝国立公園指定書[新規指定]. 環境省
- 4 ○公園の策定にかかわる報告書類
- 5 ● 財団法人国立公園協会(2007) 平成19年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 6 ● 財団法人国立公園協会(2008) 平成20年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 7 ● 財団法人国立公園協会(2009) 平成21年度国立・国定公園総点検業務報告書.
- 8 ● 株式会社建設技術研究所北海道支社・環境省北海道地方環境事務所(2013) 平成24年度富良野芦別・日高山
- 9 脈襟裳基礎資料収集分析業務報告書.
- 10 ● パシフィックコンサルタンツ株式会社・環境省北海道地方環境事務所(2017) 平成28年度日高山脈襟裳国定公園
- 11 及び周辺地域調査業務報告書.
- 12 ● 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2018) 平成29年度日高山脈襟裳国定公園及び
- 13 周辺地域調査業務報告書.
- 14 ● 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2019) 平成30年度日高山脈襟裳国定公園及び
- 15 周辺地域調査業務報告書.
- 16 ● 株式会社さっぽろ自然調査館・環境省北海道地方環境事務所(2020) 令和元年度日高山脈襟裳地域に関する公
- 17 園計画策定検討業務報告書.
- 18 ○日高山脈地域における調査報告書類
- 19 ● 北海道(1978) 日高山系自然生態系総合調査報告書(動物編).
- 20 ● 北海道(1979) 日高山系自然生態系総合調査報告書(総説・植物篇).
- 21 ● 株式会社さっぽろ自然調査館(2008) 平成20年度大雪・日高緑の回廊及び周辺に存する天然林等の森林環境等
- 22 基礎調査委託事業報告書. 北海道森林管理局
- 23 ● 株式会社さっぽろ自然調査館(2008) 平成20年度大雪日高地域の森林生態系保護地域等の設定等のための調
- 24 査. 北海道森林管理局
- 25 ● 株式会社さっぽろ自然調査館(2011) 日高山脈森林生態系保護地域設定報告書、大雪・日高緑の回廊設定報告
- 26 書. 北海道森林管理局
- 27 ● 様似町(2021) 特別天然記念物アポイ岳高山植物群落再生事業令和2年度実施報告書. 様似町
- 28 ● 様似町(2022) アポイ岳自然環境保全再生基本計画. 様似町
- 29 ● 渡辺修・渡辺展之(2022) 保護区域を効果的に拡大するには. 自然保護589
- 30 ○植物に関する総合的な文献
- 31 ● 伊藤浩司(編著)(1987) 北海道の植生. 北海道大学図書刊行会
- 32 ● 林田光祐(1989) 北海道アポイ岳におけるキタゴヨウの種子散布と更新様. 北海道大学農学部演習林研究報告, 4
- 33 6(1), 177-190
- 34 ● 高橋誼(1990) 日高山脈幌尻岳の高山植物. 平取町商工観光課
- 35 ● 新版「えりもの植物」出版実行委員会(1999) 新版えりもの植物. えりも町教育委員会
- 36 ● 高橋誼・田中正人(2003) アポイ岳の高山植物と山草. アポイ岳ファンクラブ
- 37 ● 増沢武弘ほか(2005) 特集1: アポイ岳の植物群落-アポイ岳の高山植物群落の現状と将来について. 日本生態学
- 38 会誌(55)
- 39 ● 佐藤謙(2007) 北海道高山植生誌. 北海道大学図書刊行会
- 40 ○動物に関する総合的な文献
- 41 ● 北海道環境科学研究センター(1996) ヒグマ・エゾシカ生息実態調査報告書Ⅱ野生動物分布等実態調査(ヒグマ:
- 42 1991~1995年度). 北海道環境科学研究センター

- 1 ● 柳川久・山田知江美・植田幹夫・市川利美(2004)北海道十勝・日高地方の翼手類相(3)えりも町猿留川上流部
- 2 における捕獲記録. 森林野生動物研究会誌
- 3 ● 宮腰靖之(2007)サケ・マス類の生息環境と資源増殖に向けた取り組み. 第4回河川環境と魚類に関するセミナー
- 4 ● 川辺百樹(2008)北海道におけるエゾナキウサギの分布. 上士幌町ひがし大雪博物館研究報告30号
- 5 ● TomokiSakiyama,JunkoMorimotoc,OsamuWatanab,NobuyukiWatanab,FutoshiNakamura(2021)
- 6 Occurrenceoffavorablelocalhabitatconditionsinanatypicallandscape:EvidenceofJapanesepikamicr
- 7 ofefugia. GlobalEcologyandConservation27
- 8 ○地質に関する総合的な文献
- 9 ● 高橋功二・鈴木守(1986)5万分の1地質図幅「日高」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 44p
- 10 ● 蟹江康光・酒井彰(2002)5万分の1地質図幅「浦河」および同説明書. 地質調査所
- 11 ● 松下勝秀・鈴木守(1962)5万分の1地質図幅「農屋」および同説明書. 北海道立地下資源調査所, 31p
- 12 ● 北海道立地下資源調査所(1978)5万分の1地質図幅「岩知志(札幌-45)」および同説明書. 北海道立地下資源
- 13 調査所, 46p
- 14 ● 和田信彦・高橋功二・渡辺順・蟹江康光(1992)5万分の1地質図幅説明書『三石』および同説明書. 北海道立地
- 15 下資源調査所, 73p
- 16 ● 吉田尚・松野久也・佐藤博之・山口昇一(1959)5万分の1地質図幅「比字(札幌-56)」および同説明書. 北海道
- 17 開発庁, 54p
- 18 ● 橋本誠二・鈴木守・小山内照(1961)5万分の1地質図幅「幌尻岳(釧路-50)」および同説明書. 北海道立地下資
- 19 源調査所, 46p
- 20 ● 産業技術総合研究所地質調査総合センター(2002)地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)「浦河地域の地質
- 21 (釧路-69)」. 北海道立地下資源調査所, 43p
- 22 ● 松野久也・山口昇一(1958)5万分の1地質図幅および同説明書『静内』. 北海道開発庁, 36p
- 23 ● 酒井彰・蟹江康光(1986)地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)「西舎地域の地質」. 地質調査所
- 24 ○利用に関する総合的な文献
- 25 ● 宮坂省吾・田中実・田近淳・中川光弘・岡孝雄(2011)札幌の自然を歩く[第3版]—道央地域の地質あんない. 北海
- 26 道大学出版会
- 27 ● 駒井千恵子・三浦忠雄(1998)フィールドガイド日高路. 北海道新聞社
- 28 ● 様似町(2010)アポイ岳ジオパークガイドブック. 様似町
- 29 ● 梅沢俊(2012)北の花名山ガイド. 北海道新聞社
- 30 ● 梅沢俊・菅原靖彦・長谷川哲(2020)最新第3版北海道夏山ガイド4日高山脈の山々. 北海道新聞社
- 31 ○保全に関する総合的な文献
- 32 ● 佐藤謙(1993)生物の多様性の保護を熟考した緑化を!百人浜緑化問題. 北方林業45(8)
- 33 ● 高橋健(2001)日高山脈の魅力とファンクラブの活動. 北海道の自然39
- 34 ● 北海道自然保護協会(2006)日高山脈とタ張山地を国立公園とする要望書. 北海道の自然44